

ピアニストの田崎悦子「写真」が「自分の好きな曲を並べて」2006年に始めたシリーズ音楽会「田崎悦子 ピアノ大全集」が、22日の第6夜（東京文化会館小ホール）で完結する。【梅津時比古】

# 田崎悦子のシリーズ音楽会 「ピアノ大全集」が第6夜で完結



「そろそろ一人の作曲家の全曲演奏などをやるころなんでしょうけど、全曲というので私にはどうしても、曲から自分が愛されていないと思う曲も出てきてしまう」と田崎。「無理やり全曲をやるより、自分がこれまでの音楽人生の中で本当にほれ込んでしまった曲だけを全部やってみようと思った」

バッハ、スカルラッチェイから始まって、ベートーベンの最後のソナタ、シューベルトの遺作の変ロ長調、ブラームス「6つの小品」、シューマン「クライスレリアーナ」と続く。

「ちょうど時代ごとに6夜のプログラムを組めると気づいた。でも、たとえばバッハとスカルラッチェイは同じ年に生まれたんですが、同じ時代でも、色心もまるで違う。もともと好きな曲だったけど、さまざまな違う魅力が見えてきた」

「同時に、それが作曲家の痛いところから出発していることも分かった。傷を見せてもらうと、こちらもこれくらいだと平気で傷を見せられ

## ロックバグ取り上げ「詩と曲、淡い恋のよう」

る。うまく弾こうなどという気持ちは、さらさらなくなっ

た」  
最終回にはバルトーク、池辺晋一郎と共に、米国の現代作曲家のロックバグを取り上げる。1976年、米国で「10人の有望な若手ピアニスト」に選ばれた田崎が、その企画の一環としてロックバグに作曲を委嘱し、ケネディセンターで世界初演した「バルティータ ヴァリエーションズ」だ。

脳腫瘍のため20歳で死去した彼の息子が書いた詩「深い鐘のうねり」を核に、ロックバグがバッハへのオマージュとして作った曲。田崎は「彼も彼の息子も、この世にもういないけれど、精神だけが飛び交う場所で接していられる幸せを、淡い恋のように感じる」と言う。

そして最後は、このシリーズの最初に弾いたバッハの「バルティータ第4番」を再び取り上げる。「最初とは違って見えているとは思っているので、どうなるのか楽しみ」

問い合わせは03・322315

・37777へ。